

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会

*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159

（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 **13** 号

☆2017年(平成29年)

2月28日 発行

★八木重吉記念館館長八木藤雄様逝去

2017年の正月、1月4日に八木重吉記念館館長の八木藤雄様が逝去されました。通夜が9日{火}の夕方、告別式が10日（水）の午前中に橋本駅近くのセレモニーホール「永田屋」で執り行われました。ここ数年は茶の花忌に出られないほど、体調がすぐれず、長女の佐藤ひろ子様が近所の方の協力を得て茶の花忌をすすめていました。折しも昨年から市民文学館の『八木重吉展』の企画が立てられ、文学館の方が藤雄様のところに出向いて記念館に納められている資料の借用の承諾をとり、詩人で評伝『詩人八木重吉』の著者である田中清光氏の指導を仰ぎながら、資料をわかりやすく整理して展示し、期間中に講演や朗読会等の催しも入れて、重厚な展覧会となり、54日間で5003人の来館を記録したところでした。長年、藤雄様は、八木重吉の甥として記念館と重吉の資料をしっかり守るという強い意志をもっていたせいか、「自分が元気なうちは自分の力で」という姿勢を見せていて、最近、周囲の方々が、もっと楽な形にしたらどうかと思い始めていました。藤雄様の茶の花忌にける思いも考慮しながら、もっと公に公開してもらえたらと思う重吉ファンの願いを考えて、最も身近な支援機関とされていた町田市民文学館が、今回直接企画を立ててくれ、八木重吉展開催となりました。かつてない規模の展覧会となり、その報告をしたところで、安心したかのように藤雄様は旅立っていきました。

私（小林）と記念館や藤雄様とのつながりを振り返ってみますと、昭和59年の秋に記念館が開館する年の夏、友人と生家を始めて訪ね、葉子夫人に案内された記憶があります。記念館となる土蔵の横に小屋が有り、まだ整理されていない資料が積まれていて、開館までに整理する予定とのことでした。記念館が開館された翌年の昭和60年2月、柏に愛好会が結成された時、一日も早く訪れたいという会員と2人で記念館に行きました。さらに愛好会の有志数名で8月3日再び記念館を訪問し、柏に詩碑を作る準備をしていることを藤雄様に話しました。そしてこの年の10月26日、天利武人牧師、建立委員会、愛好会等の協力で柏の詩碑「原っぱ」が完成し、11月4日に除幕されました。その時に八木藤雄様に参加していただき、序幕の紐を引いて頂きました。

その後命日の集まりは茶の花忌という名前で定着し、私も参加するようになり、そのたびに地域の方々と作る細やかな接待を受けました。ただ仕事で忙しかった時期は参加できないまま過ぎましたが、退職が迫っていた頃からここ数年は毎年続けて参加させて頂いておりました。2012年ぐらいまでは、藤雄様の顔を見ることが出来ましたが、その後はいつも病床にあって、顔を見られないのが残念でした。

八木藤雄様の茶の花忌と記念館にける情熱をいつも感じてきました。必ず、好きな詩を読まれての開会の挨拶は、穏やかな口調でしたが、心がこもっていました。ここまで情熱を傾けて来られたことに敬服しています。

藤雄様の代わりにここ数年茶の花忌を運営してくださっていた長女の佐藤様に依れば、病床で藤雄様は、重吉の詩を最後までよく読んでいたようで、亡くなる直前には、「冬の日」を読んでいたということを聞きました。92才の生涯、八木重吉の甥としてよく記念館を守って来られました。ご冥福を祈りたいと思います。



冬の日

冬の日

やわらかく

慈悲の顔のようにあかるい

（詩稿「鬼」大正15年1月22日編）

昨年報告

1) 茶の花忌(墓前礼拝と八木重吉展見学)

2016年10月26日も、昨年に引き続き良く晴れた秋の日となりました。今年は市民文学館の関係者や法政大学関係者らが集い、いつも来ている方々を加えて50人くらいの方が、墓前礼拝に参加しました。恒例の桜美林教会の小林茂牧師の司式で進められ、「願い」という詩を引用され、「それは新約聖書の内容を踏まえた詩であり、熱心に聖書を読んでいたクリスチャン重吉の心をよく表している。」と感話を語られました。



豊かな緑の中にある生家



墓前礼拝



茶の花が一輪咲いていました

その後、いつもは生家の庭で行事が続きますが、今回は、町田市民文学館の『八木重吉展』見学となりました。文学館からの迎えのバスが来て、墓前礼拝だけで帰られた方を除くと全員乗ることが出来ました。文学館の神林様の話と乗車した方々の自己紹介をしているうちに、30分余りで文学館に到着し、茶の花忌参加者は無料で展覧会場に入ることが出来、十分に見学することができました。文学館の好意で、一通り見終わったところで控室に案内し、今回の展覧会に合わせて作成された図録を配布する計画だったのですが、いつのまにか三々五々解散のようになってしまって、控室に集まったのは数名でした。そこで茶の花忌に参加された方で私が把握できる分の図録を戴いて、あとで私から送りました。展覧会は、記念館見学だけではよく理解できないところや、お目にかかれない資料がたくさんあり、見ごたえのあるすばらしい内容だと皆さんが感動していました。

今回の企画は、昨年から市民文学館の企画として準備して来たもので、全集発行の時も尽力された田中清光氏の指導の下、記念館の承諾を得て、貴重な資料をお借りし、時代の流れに分類して、見学者にとって何が知りたい資料かも考慮して、重吉の絵画関係の資料や、登美子夫人（その当時は島田とみ）にあてた生のラブレターが多数展示されて、重吉ファンは勿論のこと、初めて訪れた方にも興味を引くすばらしい展示になっていました。

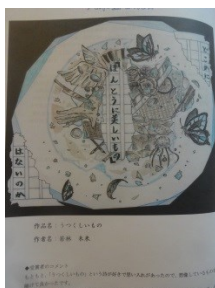
10月下旬から12月のクリスマスまでの、約2か月にわたる展覧会の期間中、並行していくつかの講演会や演奏会、朗読会もあり、普段の入館料も400円と安く重吉の愛好者にとってはとても満足のいく展覧会でした。延べ54日間で5003人の来館、また多数の方々が感動したとの感想を寄せて下さったそうです。

2) 八木重吉展一さいわいの詩人一展について

八木重吉の貴重な資料の本格的な展示だけでもすばらしい展覧会でしたが、並行して、事前に詩画コンテスト、期間中に講演会、コンサート、朗読会、文学散歩などが催されていました。その中から、2つ紹介しておきます。

1) 八木重吉詩画コンテストに関して

7歳から80代まで幅広い年代の方からご応募があり、43点集まりました。この中から八木重吉展賞1点、ことばらんど賞2点、入選作品8点が選ばれました。



八木重吉展賞

「うつくしいもの」からイメージ



ことばらんど賞

「花がふつてくと思う」からイメージ



ことばらんど賞

「果物」からイメージ

「果物」の詩画は、茨城の愛好会の仲間小澤則男さんの作品です。入選の 8 点の中にも 4 点選ばれています。「オーソドックスな方法の中に、素朴な抒情性がにじみ出て美しい」という審査員のコメントをいただいていた。

2) 11 月 6 日の田中清光氏の講演

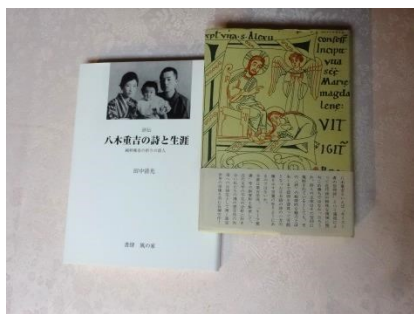
80 名定員の講演会場が満席でした。田中氏は八木重吉研究の最も基本的で詳細な評伝『詩人八木重吉』の著者であり、筑摩書房の八木重吉全集 3 巻の編集、『八木重吉アルバム』の著者です。

まず八木重吉との出会いから、評伝と全集出版に至るいきさつが語られました。昭和 20 年 14 歳の時、東京大空襲にあった体験が大きな衝撃であり、人生を考える中で詩人の道へ進んでいった田中氏は、最初立原道造に感動して研究史、評論を書きました。数年後創元社版の八木重吉詩集に出会い再び感動、研究して八木重吉論を雑誌に載せました。そのうち串田孫一さんから、鎌倉の吉野秀雄の夫人登美子さんが、重吉の妻だったことを知り訪問し、帰宅してから礼状を書くのと登美子夫人から丁寧な返信の手紙が有り、その交流から重吉の評伝を書く方向に進み、1969（昭和44）年に『詩人八木重吉』ができたそうです。10 年後に改訂版を出し、つづいて全集の編集の話が進み、3 年かかって昭和 57 年筑摩書房から八木重吉全集 3 巻と八木重吉アルバムを発行することになりました。この出版によって全国から多くの反響が寄せられ、重吉の詩は「魂の糧」「心の慰め」「生きていく精神の光」と言われて、田中氏はこの仕事をして本当に良かったと思われたとのことでした。

次に八木重吉の生涯を幼少年時代から、鎌倉師範、東京高等師範、御影師範学校赴任、柏への転勤、発病して茅ヶ崎への転居と死亡に至るまでを語られました。そのあいだに、生前に『秋の瞳』、生前に編集を始めたが間に合わなかった『貧しき信徒』を死後出したが、それ以外にも多くの詩稿を残し、それらを登美子夫人が大切に守り保存したことのすばらしさ、さらに日本人としては稀な、キリスト教との真摯な対決と受容を成し遂げた詩人重吉について力説されました。

講演後の質問コーナーでは、重吉のかなしみはどこから来るのか、重吉にとっての詩の位置、「木に目が生っている」と言う詩の表現の意味などについての質問が有りました。悲しみは重吉が幼少期からもっていたものであるけれど、詩の中には明るいものもあり性格が悲観的だったわけではない事、詩人であることを断罪するくらいに詩と信仰の葛藤が見られても、やはり詩作することが求道の手段であった事、重吉の命に対する深い愛が「木に目が生る」という表現を生み出したのではないかと云う事、などの答えがありました。

講演終了後、今回の八木重吉展に合わせて出版した『八木重吉の詩と生涯』を購入する方には、直筆のサインをしてくださるということで、並んで一人一人サインしてもらいました。『詩人八木重吉』には載せられなかった情報を付け加えながら、八木重吉の生涯をわかりやすく解説した本になっています。



田中清光氏の評伝『八木重吉の詩と生涯』(左)と『詩人八木重吉』(右)

八木重吉展図録

★ホームページ案内

4 年前から「八木重吉の詩を愛好する会」のホームページを開設して情報提供していますので、ご活用ください。また連絡欄を通して全国の愛好者と情報の提供や交換をしていきたいと思っています。

ホームページのアドレスと、管理者への問い合わせや情報提供のための E メールアドレスは以下です。

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (作成途中の部分があることをご了解下さい)

E メールアドレス kmat27aiko@gmail.com (管理者小林正継)

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。ファンの思いを後世に残すという目標で企画しています。今までに、3人ずつ第2集まで作成していますが、現在第3集の作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」

字数: 2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切: なし(随時お送りください)

送り先: メール (kmat27aiko@gmail.com) か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

::

* 豆知識 <八木重吉生家周辺にある詩碑と場所>



★ 武田孝一氏急逝

柏の八木重吉の詩を愛好する会の創立当時の会員であった武田孝一さんが、2月15日、急に倒れ、そのまま亡くなりました。84歳です。19日告別式があり、出席された愛好会会員の小澤則男さんから連絡を頂きました。地元日立の文化人として大活躍されており、イギリスロマン派学会関係の会合には都内までしばしば出かけ、奥様との音楽関係の行事にも助力、海外にも積極的に出かけ世界的な視野をもち、また教会の重要な役員でもありました。重吉とキーツとの関係には早くから言及され、英文学者の観点からの鋭い考察もしていました。特徴的だったのは、重吉の夫人であった登美子夫人との出会いに感動しており、重吉を陰で支えていた気丈な心をいつも語っていたことです。茨城で数年間開催されていた八木重吉シンポジウムのリーダーとして活躍されていた時も、登美子夫人をテーマにして語り合った時が有りました。登美子夫人の日本人女性としての気品を理解した武田さんは、重吉の日本人としての特徴にも注目し、汎神論的な日本の風土の考察もしていました。自ら短歌を詠む歌人そして随筆家でもあり、歌集、随筆集、研究論文を多数著わしています。私もそのほんの一部を頂いていますので、次号で紹介できればと思っています。今は神様と共にいる武田孝一さん、ただ感謝のみです。